

土木学会四国支部「土木紀行」 No.9(徳島県)

～三好橋～

兩岸絶壁山紫水明なる地点に架けられたる一大吊橋なり



図1 現在の三好橋

吉野川上流に位置する三好市池田町に、アーチ部分がスカーレットでトラスがルミナスグリーンのツートンカラーで彩られている三好橋があります。この橋はアーチの上に橋桁が載っている上路式ローゼ橋という形式になっています。今でこそ、アーチ橋となっていますが、以前は吊橋だったのです。

三好橋が架けられたのは1927年(昭和2年)5月、当時は東洋一の吊橋として名をとどろかせていました。以来、四国四県の交通の要衝として重要な役割を果たしてきました。中央の塔柱支間140m、左側径間トラスと右側径間トラスがそれぞれ31.5mの合計203mの三鉸式鋼補剛構吊橋(トラス



図2 昔の三好橋¹⁾

によって剛性を上げた桁を3つのヒンジによってつなげた吊橋)で、右岸側にさらに20.25mの単純鋼鈹桁橋が二連並んでおり、全長が243.5m、幅員が6.1mとなっていました。

この東洋一の吊橋、三好橋を設計したのは、橋梁設計技術者の増田淳です。日本の橋梁設計技術者といったら、まず彼が挙げられます。彼は日本各地の橋の設計をおこなっており、徳島においても三好橋以外に穴吹橋、吉野川橋などの設計を手掛けました。増田淳の会社案内には当時の三好橋の様子が「兩岸絶壁山紫水明なる地点に架けられたる一大吊橋なり」と紹介されています。

架設されてから60年経った1987年(昭和62年)6月にメインケーブルの一部が腐蝕のため切断しているのが発見され、補修、補強工事に着手しました。このとき既設のアンカ

レッジがケーブルを直接埋め込んでいるため再利用できないこと、地形的な制約から新設する場所もないということから、ケーブルを取り替えることは事実上不可能と考えられ、アーチで支えることになりました。そして1989年(平成元年)8月に、上路ローゼ橋になったことにより、強度が増しました。以前は三好橋のスパンでは吊橋にするしかありませんでしたが、今では技術の進歩によりアーチ橋でもスパンを渡すことができるようになったことがうかがえます。

現在では、橋の入り口に石碑があり、吊橋であった頃の三好橋を見ることができます。吊橋当時に使われていたメインケーブルの一部もモニュメントとして残されています。また、右岸の階段を下りていくと図4のメインケーブル定着部、橋の上から見下ろすと図5の主塔の建っていた跡を見ることができます。他にもよく見ると吊橋だった頃の名残を見ることができるので、三好橋へ立ち寄る機会があったら是非探してみてください。



図3 メインケーブルの一部



図4 メインケーブルの定着部



図6 ここにハンガーケーブルが架けられていました



図5 主塔の跡

参考文献

- 1) 阿波の橋めぐり、坂本好、(株)アルス製作所創立50周年記念誌刊行会